氏名	加藤　英明
学位の種類	博士（人類学）
学位記番号	人博甲第 18 号
学位授与の日付	令和 2 年 3 月 20 日
論文題名	「単品モノ」をつくる町工場の民族誌 ―西三河地区における自動車生産ラインの裏側で―
審査委員	主査（教授）坂井　信三 （教授）後藤　明 （教授）大塚　達朗 （教授）吉田　竹也 （教授）佐々木　重洋　（名古屋大学）

１．論文の内容の要旨

本論文は、これまで主題的に取り上げられることのなかった現代の工業社会におけるモノ製作の重要な一側面を、愛知県西三河地区の町工場の事例をとおして明らかにしようとする。それはトヨタによる自動車生産ラインの裏側で量産システムの維持を担いながら、それとはきわめて異なる論理でモノづくりを展開する「単品モノ」の製作である。

「単品モノ」とは、量産工場の設備に組み込まれている部品や、試作部品のことである。個数がごく少なく、受注のたびに素材も形態も異なるそうした部品は量産システムと不可分に結びついているが、その製作を担う町工場は従来のトヨタ生産システムに関する社会学や経済地理学などの研究からはもれていた。本研究はそこに注目し、人類学における研究蓄積の少ない現代の工業社会におけるモノづくり研究に貢献しようとするものである。

第 1 章は、「単品モノ」の町工場と不可分に結びついている「トヨタ生産システム」の歴史を明らかにし、続く第 2 章から第 5 章までは、観察とインタビューにもとづいて「単品モノ」製作の町工場のあり方を多面的に記述する。第 2 章は「単品モノ」の町工場が自動車業界を超えて他業界とも横断的に関係を築く傾向があることを 4 つの町工場の取引関係から明らかにし、次いで第 3 章では一つの町工場（Ｔ社）に視点を絞り、「単品モノ」に関わる町工場や商社が水平的な人的ネットワークによってつながれている実態を記述する。続く第 4 章と第 5 章は、同じくＴ社を舞台に、機械や道具の選択、製作工程の編成、仕事場のレイアウトなど、「単品モノ」製作を実現する人、道具、身体、空間のあり方を「モノづくりの民族誌」として記述する。

以上の記述・分析にもとづいて、第 5 章では「単品製作ブリコラージュ」ともいうべき「単品モノ」製作が「トヨタ生産システム」と共進化する形で発展してきたと結論する。

２．論文審査の結果の要旨

これまでトヨタをめぐる生産システムに関しては経営学、社会学、経済地理学などの分野で多くの研究が蓄積されており、階層化した分業システムや「かんばん」、「TQC」などの独自の生産管理が明らかにされてきた。それに対して本研究が取り組もうとするのは、そうした「トヨタ生産システム」と密接に結びつきながら、それとは異なった論理で展開している「単品モノ」と呼ばれる部品製作を担う一群の町工場のあり方である。それは高度に組織化された工業的生産システムの周辺で、その安定的な稼働のために不可欠な多種多様なニーズに対応した「単品モノ」製作の町工場である。しかし経営学的関心に偏った従来の研究では、この種の町工場は階層構造の上部から及んでくるコストダウンの要求を最下部で吸収する「バッファー」的存在としてしか認識されてこなかった。それに対して本研究は、長期間にわたる人類学的フィールドワークをとおして、現代の工業社会の底辺を支える多数の人々の、微細なモノ製作の実態を究明しようとしている。その意味で本研究は、これまで光を当てられることのなかった、工業社会におけるモノづくりの一面を明らかにする民族誌として高く評価することができる。

とくに第 3 章、第 4 章、第 5 章の「モノづくりの民族誌」は、町工場の経営者たちから

の綿密な聞き書きと「単品モノ」の製作現場の具体的な観察、そして製作工程の分かりやすい図示によって、「単品モノ」製作を実現する人と道具と空間のあり方を民族誌的に描き出すことに成功している。町工場に関する最近の人類学的研究としては、農業機械を現地の諸条件に合わせてカスタマイズするタイの人々の実践の研究（森田 2012）がよく知られている。しかしそれはエスノメソドロジーなどの理論的な関心にかなり偏っていたため、職人たちが具体的にどのように製品を作っているのか、具体像が見えてこないという難点があった。それに対して本研究は、現場の人々の言葉と実践に密着しつつ、具体的な製作工程の工夫や身体感覚を動員した機械操作、製作用具の用意や配置、図面の解釈、精度の計測、そしてそれらを統合した「段取り」によく目配りした民族誌となっており、現代社会における町工場のモノ作りの具体的な姿を描き出した人類学的研究として独自の学術的な貢献をなしているといえよう。

その上でいくつかの問題点を指摘するとすれば、第一に、本研究は具体的な事実に関する緻密な記述に固着するあまり、それを抽象的なレベルで考察する作業が不足していることが挙げられる。たとえば、先行研究からはド・セルトーによる「戦術と戦略」の区別（1980）、ケラー夫妻による taskonomy の概念（1996）、ルロワ＝グーランのシェーン・オペラトワールの概念（1964）など、職人の製作実践を分析するいくつかの理論的手立てが参照されているが、具体的記述においてはそれらが十分に活用されているとはいえない。また本研究の記述からは、コンピュータ制御された製作現場でもなお重要な役割を果たしている身体感覚、図面を現実の作業工程に落としこむために職人が作る手書きのメモの認知的機能など、技術論や認知論から見て興味深いいくつかの事実が明らかにされている。しかしそれらを理論化する試みが十分でないために、先行研究の分析概念を精緻化し、さらに新しい概念を産出してより高次の研究へと進展させていくという学術発展への貢献は今後の課題として残されている。

第二に本研究は、「単品モノ」の町工場は「トヨタ生産システム」に従属的ではないがそれに必要不可欠なシステムであり、両者は共進化してきたと結論づけている。しかしその理解は表層的なものにとどまっているように思われる。両者の「共生」は、また「強制」でもある。おそらくそこには産業資本主義社会における支配の力学が働いているのであり、今後さらにフーコーやハート＆ネグリなど最近の権力論を参照しつつ、生産という局面における「支配の社会学」へと議論を深めていく課題が残されているだろう。

このような課題を指摘できるとはいえ、本研究は、従来の「トヨタ生産システム」の研究では明確に捉えられてこなかった諸事実を長期にわたる人類学的フィールドワークをとおして明らかにしたこと、および現代の工業社会におけるモノづくりの人類学的研究に独自の貢献をもたらす「モノづくりの民族誌」を完成させたことにおいて、博士論文としての十分な価値をもつと判断できる。

令和 2 年 2 月 21 日

主査（教授）坂井　信三

（教授）後藤　明

（教授）大塚　達朗

（教授）吉田　竹也

（教授）佐々木　重洋　（名古屋大学）